

防コミの歩き方

BOSAI
KOBE
MIRAI

地域に居住する外国人の方々

長田区鷹取地区で主にスペイン語圏から来日している人を対象に支援活動され、情報誌「Latin-a」(Web: www.latin-a.com/ E-mail: redaccion@latin-a.com)の編集長をされている大城口クサナさんが長田消防署に取材に来られました。お互いに貴重な情報交換をすることができましたので、ご紹介したいと思います。なお、南米では、ブラジルを除くほとんどの国において、スペイン語が公用語になっています。

●阪神・淡路大震災を経験して

大城口クサナさんは1991年にペルーから来日し、ご主人お子様とともに神戸市内に在住されています。

伺ったところ、地震の頻度は日本よりもずっと少ないため、ペルーの人の地震に対する意識は日本人のそれと比べてかなり低く、阪神・淡路大震災を来日4年目に経験した大城口クサナさんは、当初何をしたらよいのか全くわからなかったそうです。

一番不安に思ったことは、被災した外国人が日本人と同じように避難所に受け入れてもらえるかどうかということだったそうです。そこは「困ったときはお互い様」で、他の避難者と同じく避難所のルールに従っておれば、外国人でも何ら問題はなかったそうです。一部の国では必ずしもそうはいかず、外国から来た人が特別扱われることもあるので、当時の日本の皆さんの対応にはとても助けられたそうです。

●災害時の在日外国人

今回の取材の質問では、やはり119番

通報がスムーズに通じるだろうかという不安や、広報誌の外国語版などの「言葉の問題」に関することが多くありました。

鍵本長田消防署長から阪神・淡路大震災時の経験を交えながら、説明しました。



一時的な旅行者と異なり、在住されている方でまったく日本語がわからないという場合は少ないというものの、わからないことは地域に詳しい方に聞くというのが災害への最善の対処法だということになりました。

そのためにもできるだけ普段から地域とのつながりを持ち、「お馴染みさん」になることが最も現実的な方法です。

●外国人に対する配慮

地域に在住されている外国人の多い防災福祉コミュニティでは、災害時に言葉の問題で困らないように、たとえば津波避難の標識などは複数の言語で表示しています。

また、避難が長期化することも考えて、地域の訓練では炊き出しなどに各国の料理を入れてみたりと外国人に対する配慮にも取り組んでおります。

(長田消防署 菅井 晶)